

カトリック 仙台教区報

2010年7月4日 No.194
発行
カトリック仙台司教区
980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378
発行責任 広報委員会
URL <http://sendai.catholic.jp/>

宣教共同体を目指して！

仙台教区教会委員長の集い

仙台教区内の各小教区共同体が「現状を把握した上で、宣教共同体を目指して歩んでいくために」をテーマに、教会委員長（信徒会長）の集いが、6月12・13日、盛岡四ツ家教会を会場に開催された。仙台教区では、佐藤千敬司教の時、1996年2月に元寺小路教会で、信徒会長の集いが行われて以来、平賀司教着座以来初めてのことであった。教区内の53教会のうち46教会から52名が参加。平賀司教と教区本部事務局関係者と、盛岡地区担当司祭を含め60余名が集まった。

この集いは、2006年10月の宣教会に出るよう組分けされていた。教司牧評議会定例会で発議され、今年3月の同会で開催が決定した。

開会に先立って平賀司教は、「私たちは神の民として呼ばれ、主の祝福を受けた者として、その喜びを持って主のお望みを実現していく使命を持っています。それぞれの教会は、様々な困難を抱えていることでしょう。教会委員長としていろいろな苦労を乗り越えていくために力を発揮してください。いつもキリストが共にいてくださるという信仰を持って頑張ってください」と励ました。



初日に2回の分科会、2日目には各県別の分科会が行われた。初日の分科会のテーマは①教会の財政問題、②共同体運営、③社会との関わり、である。事前に行われたアンケートによって各自2つの分科

人のいない教会では、教会の維持管理や、社会との関わりをどうすればよいか。全てを教会委員長が対応している教会もあるが、個人の努力だけでは限界がある。次世代を担う30代から50代は、仕事が多忙で教会活動に積極的に参加

することが難しい。

また、教会の次世代を担う子どもたちを育て、要理の教育にも工夫が必要となる。

信徒の減少は、財政的にも苦しくなり、教会の維持管理や修繕も思うに任せない等の問題を抱えている教会も少なくない。

大きな教会は大きな教会なりに、信徒同士のコミュニケーションが希薄で、教会運営に関わる人が固定化し、信徒の教会への帰属意識が希薄であるなどの問題もある。

教会委員長や役員にかかる負担も多く、今回の分科会の話し合いでは、積極的にこれらの問題に取り組み、解決策を模索し、それぞれの教会の取り組みや工夫の情報交換も盛んだった。

いくつかの教会同士が協力し合うことで何か新しい方向を探れないか。地域社会と連携して社会の中で教会が存在感を発揮し、福音宣教に繋げられないか。幼稚園が併設されている教会では、幼稚園児や父母を取り込んで、若返りを図る工夫ができないか等の意見交換が行われた。

各県毎の話し合いでは、互いに顔が見えるようになったことから、今後、情報の共有化を進め、教会同士の連携を深めようと話し合った。

今回の成果を自分の教会に持ち帰り教会の活性化に役立てたいという情熱に燃えて各自帰路に就いた。

（文責・広報委員会 岩井 誠）

生命の泉

▼サッカー・ワールドカップの真っ最中です。いつからこんなに熱狂的なファンが増えたのでしょうか。勿論この熱狂ぶりは全国的であり、真夜中の放映中でもないたる所で一喜一憂して大騒ぎです▼随筆家の森本哲郎は現代の人々を熱狂させているものを「神々」と呼び、スポーツも神様だと言っています。氏は現代の神さまの特性を6つ挙げています▼まず第1は「多くの人々を動かす熱狂させてくれるもの」。第2に「人々にあこがれを抱かせる欲望の対象」。第3に「人々を無条件に信じさせる魔力を持つているもの」。例えば偏差値など子どもにとっては絶対対。第4に「人間を超えた力を持つているもの」。自動車や飛行機などの機械類、組織なども個人の力を超えていると感じる。第5は「人々を安心させてくれる」薬やサプリメントやブランド物などはその類か。第6は「抜け出られないもの」で依存症を引き起こす政治や金銭・ギャンブルなど色々ある▼確かに世界的に人々を興奮させてくれるサッカーなどは「神」の如きものだ。このように現代を動かす神々は難しい教義などはないし、ただ一緒に楽しめれば気分が高揚して仲間もできる。現代の神さまは「感覚的にわかるもの、目に見える神」です▼これらは私たちが、偶像崇拜と呼んで避けるように教えられてきたものです▼サッカーなどは夢中になって応援しなければあまり面白くないことも確かです。フリーガンのような人が出てきて熱狂こそが楽しみの中身だと教えた。私たちの信仰も聖人の模範がなければ熱意は伝わらないことも確かです。（守）



わたしたちが教会（教区）なのだ

司教 マルチノ 平賀徹夫

6 月半ばに盛岡で、仙台教区の小教区の信徒代表（おもに教会委員長または信徒会長の任にある方たち）の集いがありました。仙台教区には 53 の小教区があります。5 教会からは残念ながら欠席でしたが、52 人の方々の集まりとなり、わたくしには「今ここに、仙台教区がある」ということをはっきりと感じさせてもらった集まりでした。各県では県の大会や連絡協議会などで互いに顔見知りの間柄ではあったでしょうが、「青森・岩手・宮城・福島」の教区全体・4 県からの神の子らの代表たちが、今、ここに、一緒に、いる」ということで、第一にそれはまさに詩編 133 の「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び」という言葉につながるものでした。第二に、互いに初対面という他県からの人も少なくなかったでしょうが、すぐに打ち解けてそれぞれの教会の実情を語り合っている様子は、同じ信仰を生き方の根っこに持っている者同士の交わりの姿だ、と見えました。それは、各人・各教会で知恵を尽くして行なってきた活動を参考に供し合ったり、心を開いて披瀝される苦労や困難に対しては誠実に思いを表して助言し合ったり、笑ったり感心したり共感したりする、神の子らの交わりの体験の時でした。「次回はいつころになるか」と再開を希望する意見が多く出されたことが示すように、「聖徒の交わり」のすばらしさの一端を味わえた集いであったと思います。

同じ集いがいつ開かれるか分かりませんが、たしかにこの集いの実りは来年 7 月からの「仙台教区年！」につながれると思います。それぞれの地域や県では今までにも増して知恵と力を尽くして神に感謝をささげる業を続け、さらに県の範囲を超えた「教区という教会」の枠の中で、心理的にも物理的にも、教区民の間のたくさんの出会い・深い交わりの機会となる教区大会とできるように準備していきたいものです。

・教区年の間、〇月〇日は、教区の中でどんな事があったかを知り、そのことを意識して祈るための「今日は何の日カレンダー」（仮称を作った）との提案があり、舟山師・小松師が担当することになった。その他、県を越えて子ども

・各種団体・施設等の協力依頼について、どのような団体があり、誰に連絡を取ったらよいかをリストアップし、必要ならば訪問して協力を依頼する。
・巡礼・スタンプリについて、案内用の小冊子の作成をすることについて検討。

私は 2 年半東京で日本語を勉強した後、3 ヶ月の休みをとり、カメルーンに帰り、2010 年 6 月 1 日、日本に帰って来ました。これから岩手県の盛岡地区の教会で働くことになりました。皆さんと一緒に生活しながら、お互いに心から理解し合い、分かち合っていきたいと思っています。

です。1975 年 2 月 14 日カメルーンのヤウンデで生まれました。家族は両親と 7 人の兄弟姉妹がいます。私が司祭になったのは、3 年前 2007 年 7 月 7 日の土曜日が叙階式でした。カメルーンでは、土曜日が叙階式、そしてその翌日が初ミサというのが伝統なのです。翌日の 7 月 8 日が初ミサでした。叙階式は盛大で、お祭りのようでした。90 人の神父様、新司祭が 24 人。そして助祭は 6 人。参加信者は 6000 人でした。

司祭 金祝・銀祝 おめでとう



平田 浩師
叙階 1960 年 3 月 20 日
引退 東京在住



ラシャペル・アンドレ師
(ケベック外国宣教会)
叙階 1960 年 6 月 26 日
塩釜教会主任

今年、司祭叙階 50 周年（金祝）、25 年（銀祝）を迎えられる方は次の通りです。
【金祝】
ラシャペル・アンドレ師



佐藤 修師
北仙台教会・原町教会主任兼任
叙階 1985 年 3 月 21 日
盛岡地区担当
花巻主任兼任



ラトウール・レイモンド師
(ドミニコ会)
叙階 1985 年 4 月 13 日



吉田 昌民師
叙階 1960 年 12 月 21 日
引退・司祭の家

「教区年！」準備委員会から

◆第 6 回準備委員会（5 月 15 日）

各県の県大会を「教区年」行事の一環として行うことを確認した。開年ミサは宮城県大会（2011 年 7 月）で、閉年ミサは岩手県大会（2012 年 7 月）で行う。福島県大会は 2011 年 10 月、青森県大会は 2012 年 5 月の予定。実施計画については各県の連絡協議会でよく話し合っている。記念誌の作成についての提案があり、費用のこと、どの程度の

◆第 7 回準備委員会（6 月 19 日）

・県大会の時期についての確認。青森県大会は 8 月で、12 年 6 月初めころ、福島県大会は会津若松で 11 年 10 月を予定しているが、会場は未定。
・記念誌作成について、閉年ミサの様子も入れて、12 年のクリスマスころに発行予定。編集委員会を各県 2 名＋準備委員会から 2 名で編成し、企画編集にあたってもらう。（次回までに各県から 2 名を推薦してもらう。出来れば、Eメールで連絡の出来る方）

たちの集いを考えられないか。各県の県大会は、他県にも呼びかけて参加をうながす。各教会の代表者が参加出来るようにしては。司祭と信徒が交流する場を設けて欲しい（聖香油ミサのときが良いのでは）、などの話し合いが行われた。

エテメ神父です。

よろしく！



皆さん、お元気ですか。私はケベック宣教会エテメ・エミール神父

神さまを信頼して愛と奉仕の50年

一関藤保育園創立50周年

「一関藤保育園」は、5月1日に創立50周年を迎えました。神さまの導きと教会の関係者、市民の皆さまに心から感謝いたします。

一関教会は、1902年に創設され108年にも及ぶ歴史がありますが、その中で、私たちの（殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会）藤の園マリア院との関わりは1950年から25年にわた



私がラ・サール会に入ったのは、もう5年前のこと

です。私の修道士としての召命は神の恵みによりますので、まず神に感謝します。神が私の両親や弟たちやラ・サール会の人たちに、私の行くべき道を指し示してくださいました。

私はメキシコのカトリックの家庭で育ち、おそらく幼少から祈りを教えてもらったのだと思います。両親は信仰と希望に満ちた霊性の種を植え付けてくれましたので、時が経つにつれて奉仕生活の中で、イエスに従い、仕えようと決心する基礎が固められていったのだと思います。

祖父は、病者を見舞い、聖体を拝領させ、福音のメッセージを分かち合うという使徒職を行っていました。それが少年時代の私に影響を与え、霊的な助けを必要とする人たちへの配慮を教えてく

り司牧していたバトレヘム会によって招聘されてからのことです。

戦後の混乱の中、教会付属の幼稚園をよりキリスト教的な保育をという使命を持って当時の主任司祭オスカー・エグロフ

師と共に働きました。その7年後、1960年に修道会は「藤保育園」を、その2年後には児童福祉施設



「藤の園」を開設しました。この二つの事業は社会のニーズに応えることであり、それだけに市当局も市民もとても協力的でした。今も変わらぬ支援をいただいています。また、これらの事業遂行のためにこの地域からの修道者召命も多くありました。

これからも当保育園が教会や修道会として社会に対する奉仕を継続していくことでしようが、神様のお望みになるふさわしい働き手

ージは私の心を動かし、私の内心に關わる諸問題に應える動機づけとなってくれました。

それから6年間にわたるラ・サール会の養成段階を歩みながら、私に対する神のお召しを益々意識するようになり、私の内心は強化されていきました。深い祈りと職務への専心、そして何にも増して確信に満ちた人たちに接することは大きな衝撃であり、私が到達したいと望む理想像でありました。聖ヨハネ・バプチスト・ド・ラ

招きにごたえて

(29)

サールは、私たちの奉仕している人たちの呼び掛けによく耳を傾け、常に日々の祈りの中で彼らのために祈るように修道士たちに求めました。

神は、私に献身を求めて日本に行くように促しました。宣教師としての修道士になることは、私にとって新しい挑戦となりました。

昨日も今日も、そして毎日がこの新しい召命への応えであり、それは私自身の幸福の源であるばかりではなく、周りの人たちの幸福にもつながるものと信じております。

春の後藤寿庵祭

となれますよう精進していきたいと決意を新たにしております。なお、6月19日(土)に式典祝賀会が行われました。(Sr.阿部 愛子)

奥州市街の道路沿いにある水路に水が流れ出すと、穀倉地帯の水田に水が入り、エンジン音が響き、次々と苗が植えられ緑に変わる。後藤寿庵がこの地を治め始めたころは、砂漠に似た荒地だったと記されている。

禁教令による迫害の時代に、寿庵が命がけで始めたこの堰は「寿庵堰」と命名され、村人から「寿庵先生の御前水(せんすい)」と呼ばれ、千ばつの年でも福原

には水が止まることなく流れ現在に至っている。

福音宣教にも力を注いだ寿庵は、この地を「福音の地」「福愿」と名付けて館を建てた。

現在、寿庵廟が建てられ、その前で早苗が揺れるのを眺めながら、寿庵祭が行われる。



もう一つ印象に残った場面は、司教と共に祭壇に登られた高橋昌

今年、平賀司教、梅津明生師、佐藤修師、高橋昌師、ミゲル師、佐藤守也師を迎えての寿庵祭で、奥州市役所からの参加者もあり、総勢300名ほどが集まった。

また、今年の寿庵祭は、水沢で捕えられ、殉教したペトロ岐部神父が福者となられたので、その遺影を祭壇に飾り、一日も早く聖人の列に加えられるよう祈りを込めた。

水沢教会は、昨年から巡礼者が多く、「起きて行きなさい」と私たちの信仰心を目覚めさせようとしているかのようだ。

来年は、寿庵が福原に館を構えて四百年になる。福原地区の皆さんにとっても、教会にとっても意義深いものになるようにしたいと考えている。(寿庵祭実行委員長 千葉加子(あつこ))

寿庵祭に参加して

すがすがしい春の日、後藤寿庵大祈願祭に久しぶりに参加させていただいた。記念ミサの冒頭で平賀司教は、「後藤寿庵から学ぶことは二つあります。一つは、寿庵のように、人々のために全力を尽くして生きる。もう一つは、信条、信仰、信念という心のあり方を大切にして生きること。」と述べられた。招待された地元の方々もそのお話を聞いていた。

「祈り」の分かち合い③

今年の年頭書簡で平賀徹夫司教は、「『祈りに心を注ぐ一年』で信仰共同体作りを」と題して、祈るよう勧めています。これを受けて、「仙台教区報」ではこの一年「祈り」をテーマに紙上で分かち合いを継続していきたいと考えています。教区の皆様の投稿をお待ちしています。

「歩く」と、祈る「こと」

日々の中で

いわき教会 高野 幸子
自分の家から近くの川沿いのあぜ道を歩いて30分で海岸にたどり着く。周りは田んぼだけで民家も少ないその道では殆ど人に出会うことも無い。海岸も遊泳禁止地区なので静かだ。そこが自分にとって一番好きな祈りの場所になっている。

休みの日は海までの道を、川の水音、鳥の声を聞きゆつくりとイエス様に自分の思っていることを語りかけながら歩いている。良い事も悪い事も。



海に着くと防波堤に腰を下ろし広がる太平洋を見つめ、お祈りをする。

目の前に広がる海と空を見る度に、神様の作られたこの世界の素晴らしさ、偉大さを感じることが出来る。晴れた日、風の強い日、曇りの日どんな時にも綺麗だと感じる瞬間がある。

自分が信仰を持ったひとつのきっかけも自然の美しさの中でした。旅の中で素晴らしい立派な建物や遺跡を見て感動することもあります。しかし海に沈む夕日に咲く花を目にした時に、やっぱり神様の造られた世界は美しく素晴らしいと感じる時がある。その心を持ち続け、神様に感謝することを忘れないようにしたいです。

わたしたちのこんな祈り

毎日が発見の日々

コングレガシオン・ド・

ノートルダム花園町修道院

現在、わたしたちの共同体には、

2〜3名の小さい祈りのグループがいくつかあります。今回は、そこでやっていることをご紹介いたします。ミサで読まれる福音箇所を、前日に一節ずつ声を出してゆつくりと読むのです。次に、黙読して心に留まった箇所を伝えま

す（分かち合いはしません）。もう一度音読しますが、今度は先ほどと担当箇所を変えます。そして、もう一度心に留まった箇所を挙

げます。10分ほどの祈りの準備ですが、そこからたくさん恵みを毎回いただきます。

たとえば年間第5週（ルカ5・1〜11）で私は、4節「シモンに『沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をせなさい』と言われた」という言葉に心が留まりました。「沖に漕ぎ出す」だけではなかったんだ！という発見がありました。二度目の朗読後は、11節「彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った」に心が留まりました。今まで何度も目にし、祈ってきた聖書箇所でしたが、声を出して読むことによって「網をおろし、漁をし」「舟を陸に引き上げる」重労働を弟子たちが行っていたことに気がついたのです。

「沖に漕ぎ出さない」は、教皇ヨハネ・パウロ2世が2005年「世界召命祈願の日」メッセージにタイトルとして用いられた箇所です。もう一度メッセージを読み直して、またまた驚き！「沖に漕ぎ出す」ための最初の条件は「祈りの心を深めること」それは「みことばを毎日聞くこと」によって養われるとあるではありませんか！

聖霊による刷新

・祈りのセミナー「祈りの力」

◇4月6日〜6月1日（毎火曜日・全8回）於 元寺小路教会

<タイタニック>



地球をタイタニック号に例えると、もうすでに冰山に衝突している状態だという。

一部の人たちはそれを知っているが、大多数の人々は、まだ何も知らずパーティだ、晩さん会だと船上の快適な暮らしに酔いしれている。

しかし、冰山に衝突した船は、少しずつダメージを広げ、刻々と沈没の時を迎えようとしている。

タイタニックが冰山に衝突してから沈没するまでには、2時間40分ほどだった。地球が人類の生存を許さなくなるまでには、100年先か200年先のことになるかわからないが、今の私たちは、この地球の恩恵を享受して楽しんでいればよいと思ったら、私たちのひ孫のひ孫、そのまたひ孫の時代に大きな災難をプレゼントすることになる。

今のうちに、沈没の危機を回避する行動を起こさなければならない。何をすればよいのか、何をすべきでないのか、正しい知識と判断に基づいた行動が求められる。

（提供；一本杉教会 岩井 誠）

地球を大事にする会

参加者（20名）は8週間のセミナー中、主の弟子になるようにとの主の呼びかけに耳を傾けた。第一週目は平賀司教様の「キリスト信者の祈り」についての講話があった。（2〜8週はラシャペル神父様の講話）参加者は各週のテーマについて次週まで黙想し、体験したことを分かち合った。なぜ祈りが必要か。聖霊の力に気づくには、祈りが必要である。聖霊の力が私たちを成長させてくれる。祈りはキリストと結びつく道。キリストとの友情を深めるために、一日の中、祈りの時間、場所を決める。キリストと共に生きる生活を

心から喜んでいるとき、他者の心へ喜びが伝わる。これは福音宣教の重要な点である。聖霊刷新についてパウロ6世は「教会の恵みの機会」と語り、ヨハネ・パウロ2世は「教会の春の訪れのしるしである」と語った。また現教皇は「人々が『洗礼による恵みの美しさ』と堅信で注がれる聖霊の力を感ずる助けとなってきた」と賞賛した。参加者は社会において、平和、愛、ゆるしの道具となるよう祈りを捧げ、セミナーは終了した。

（北仙台教会 京野啓子）



カトリック20条の会・シンポジウム

「信教の自由と政教分離」を考える

政治のことや、社会問題はカトリックの信仰とは関係ないし、私たち信徒や教会が関わる必要がないのではないかと考える向きがある。しかし、この世の中のすべての事柄について、関心を持ち、よく知る努力をし、福音に照らして識別し、何をするべきかを考え、何か行動にあらわすことは、この世を神の国の秩序に近づけていく使命を持つ教会の大切な役割である。こうした社会問題の一つ、「憲法20条」で謳われている「信仰の自由と政教分離」の原則が、今の日本の社会の中でゆがめられたり、個人の権利が制約されたりしてはいないのだろうか。

こうした問題を学ぼうと、

「カトリック20条の会」(代表・谷大二司教)主催でシンポジウムⅡ写真Ⅱが5月29日(土)カトリック北仙台教会で行われ、約120名が参加した。



今回のシンポジウムには、谷大

二司教(さいたま教区)、溝部脩司教(高松教区)、吉田隆牧師(日本キリスト教改革派仙台教区)が講師を務めた。開会に当たり平賀徹夫司教(仙台教区)は、「全ての人の人権を

台教区)は、「全ての人の人権を考えると、一人ひとりということ、100%の人の人権を考えなければならぬ。憲法20条は一人ひとりの人権にかかわる条文でもあるので、関心を持つて欲しい」と挨拶した。

谷司教Ⅱ写真左Ⅱは「入門・憲法20条」と題し、明治憲法のもとでは、「臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於イテ」という条件付きの信仰の自由であったこと、靖国神社参拝が強く要され、それを容認したカトリック教会は、結果的に戦争に加担し



ていたことについて話し、憲法9条と共に20条を守ることの大切さを訴えた。

続いて、溝部司教Ⅱ写真Ⅱは「キリシタン殉教・漫談」と題して、キリシタンの迫害がキリシタンの側の意固地さや、狂気の沙汰と思われる行動が、当時の為政者を刺激した結果と思われる節があったことに触れ、現代においても日本の宗教や伝統に根ざした「神の国」や「美しい国、日本」などと称して宗教を特定の文化として非宗教化しようとすることに問題は、信仰にわたって「譲れないものは何か」をしつかりと見定めていかなければならないと呼び掛けた。

キリスト教改革派の吉田牧師Ⅱ写真右Ⅱは、「プロテスタント教会における『憲法20条』の意味」と題して、政府による教会弾圧の下、日本キリスト教団が、複数の教会を解散に追い込んだ事件に触れ、力あるものは、弱者を弾圧することは歴史の中で繰り返している。深い魂の中にあるものは誰からも迫害されたり、弾圧されてはならない。



「肉体を滅ぼしても、魂を滅ぼすことのできないものを恐れるな」との聖書のことは、現代の我々にも呼びかけられているメッセージであると話した。

参加者は、「憲法9条については、よく話を聞くが、憲法20条のことはあまり知らなかった。」「どちらも車の両輪のように関連していることが良くわかった」など感想を述べ合っていた。

【憲法20条】信仰の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。2. 何人も宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない。3. 国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動をしてはならない。

いやしのみサ

いわき教会には、高齢や病氣のため教会にこられない方が10人ほどいらっしゃいます。日頃は神父様にご聖体を持って訪問されています。

今回、初めての企画として、5月2日、聖霊降臨の主日に、これらの方々にお声をかけ「いやしのミサ」を行いました。当初

は、風薫る5月、マリア様の月にルルド前での野外ミサを計画していましたが、長時間の外のミサは、疲れるだろうと、



となりまして。ミサ後、信徒ホールで有志の方々による手作り料理に舌鼓を打ちながらの会食、さらにDVD『マザーテレサとその世界』を鑑賞し、隣人への愛の実践こそ私たちの務めという信念を新たにしました。

今回実際に参加された方は、2人でした。ご本人の問題、またご本人が希望しても家族の協力が得られないこと、いろいろな事情があり、皆さんに来ていただくことは難しいのですが、今後試行錯誤しながら取り組んでいこうと考えています。(いわき教会 菅野晶子)

聖ドミニコ学院「ヴェリタス館」落成 信・望・愛、イエスの心を響かせて

澄み渡る青空の下、宮城県、仙台市からのご来賓、また学校関係、教会関係の多数の方々のご臨席を賜り、6月11日、平賀徹夫司教司式で聖ドミニコ学院ヴェリタス館の落成式が執り行われました。

ヴェリタス館は「ドミニコ聖堂」の他、ランチルーム、合宿施設や会議室を備えた機能的な複合施設となっています。

特に「ドミニコ聖堂」が建つこの場所は、およそ100年前に献堂された「角五郎丁カトリック教会」が1908年から1966年まであった場所です。今、全く同じ場所に建つ「神の家」

「ドミニコ聖堂」は同じ向きで、祭壇も同じ場所に置かれてい



ます。「角五郎丁カトリック教会」をご存じの方は懐かしく思われることでしょう。

この「ドミニコ聖堂」＝写真Ⅱは2階



（聖歌隊席）を含めて500席あり、今後、聖堂朝礼や宗教行事（マリア祭・クリスマス礼拝・修養会）など、また入学式、卒業式などの行事にも活用します。その他、卒業生の結婚式、宗教関係の音楽会、講演会などにもご利用頂き、地域の方々の交わりを深めるよき場となることも考えています。

「ランチルーム」は今年度から小学校が完全給食となり、中学生、高校生は学食形式で、食育に配慮した食事を提供しています。

また、ヴェリタス館内のステンドグラス全ては、今年92歳になられるベルギー人のドミニコ会士、アルベルト・カルペンティール神父の作品です。北側のエントランス上にある「ロザリオの聖母子」の背景となる下側の部分には「信・望・愛」の象徴、信仰としての光を表すラ

ンプ、そして希望としての錨、愛としてのイエスの御心、ハートの形を見るこ

とが出来ます。いつの時代においても変わらぬ「信仰」「希望」「愛」をもつてイエスの心を伝え、生きるため

には、祈る聖なる空間、「聖堂」を大切にし、ヴェリタス館の付属施設と共に「ドミニコ聖堂」に集う全ての人々にイエスの心を響かせていきたいと願っています。

（聖ドミニコ学院 鈴木かな子）

「放蕩息子」 —ある薬物依存者の記— を編纂して

私は、昨年の3月から仙台ダルクで代表を務める飯室勉さんと一緒に、一冊の本を作っています。薬物依存に陥って生きることも死ぬことも出来なくなっていた彼が、ダルクと出会って回復していく姿を通じて、多くの人に薬物依存という「病氣」を理解してもらいたい、そんな想いを込めてツトムさんは自伝を出版する決心をしました。一人の信者さんを通じて、私がそのお手伝いをさせて頂



くことになりました。ツトムさんが話したことを私が書き留め、それを活字に打ち込んでいく。淡々とした感じに聞こえてしましますが、実はかなり熱の入った作業です。一人の人間の過去を徹底的に掘り下げていく、これにはかなりのエネルギー、そして両者の深い信頼関係が不可欠です。単に一方的に耳を傾けるのではなく、こちらからも徹底的に彼の過去に切り込んでいかなければなりません。熱気のこもった会話の繰り返しでした。

実は、私とツトムさんはあるミュージシャンのコンサート会場でバッタリ出会ったことがあります。音楽の趣味が似ているということは、感性も近いのでしょうか。幸いにも、二人の間に固くて熱い絆が生まれるのには、たいした時間はかかりませんでした。そんな二人の出会いには、まさに神様のなせる御業なのでしょう。

1年と少しの時間をかけて二人の仕事がとうとう形にな

ります。この本を通じて、一人でも多くの方に、飯室勉という一人の人間の軌跡と薬物依存という病気の本当の姿を知って頂きたいと願っています。

（東仙台 赤井悠蔵）

司教日程

7・8月

- 7・1 ①社会司教委員会
- 4 ④カトリック宮城県大会
- 7 ⑤8 東京教会管区会議
- 13 ⑥司教評定例会
- 17 ⑦19 部落差別人権委・合宿
- 27 ⑧28 岩手県カトリック連研修会
- 8・7 ⑨JCNAMマリア祭
- 8 ⑩平和を求めるミサ
- 17 ⑪宮城県カトリック連研修会
- 18 ⑫福島県カトリック連研修会
- 27 ⑬使徒職協力者の集い
- 30 ⑭31 仙台教区・司祭の集い

復活祭に洗礼を受けて ②

マリア・クリステイナ

菅野 清（80代・女）元寺小路

お優しい神父様、修道女様方の懇切なご指導と信徒の皆様のお励ましに、やっと嬉しい受洗の日を迎えました。「神様の御子は、人間としてお生まれになり、社会の底辺に生きた人々に希望の光、心の平安を与えて、共に歩んでくださいました。十字架に架けられても蘇えられ、今尚、私たちと共におられる」と教えていただきました。自分自身を振り返り、確かに私を見守って下さっておられると実感致しました。

ハンセン病市民学会 in 瀬戸内参加報告

教区人権を考える委員会

5月7日から9日まで、御供真人委員とともに「ハンセン病市民学会第6回総会・交流集会 瀬戸内」に参加した。瀬戸内には、大島青松園Ⅱ写真Ⅱ、長島愛生園、邑久光明園の3つの療養所がある。今回は、「島は語る」隔離の象徴としての《島》を再認識し、心の橋を架ける」をテーマに、岡山市内のホテルとこれらの療養所を会場に開催された。初日の交流集会は参加者が千人を越え、会場は終始熱気に包まれていた。



今年、還暦を迎えた私が生まれ

はもうすでに0歳、0歳を超えた当事者によって語られる療養所生活の様子には胸が押しつぶされそうになる。こうした歴史から私たちに何ができるのか？何をしなければならぬのか？と自問する。

「私たちには被害を追体験することはできないが、加害について考えることはできる！」というコーディネーターの総括の二日目、瀬戸内海に浮かぶ長島の会場での分科会に参加。晴れわたった五月の空の下、美しく穏やかな瀬戸内の海に囲まれ、鳥のさえずりが心地よく聞こえる静かなこの島が、国による強制隔離政策の舞台であったと思うと、信じがたい思いとともに言いようのない苦しみ込み上げてきた。

(園部 英俊)

初日は基調講演。二日目は邑久光明園へ。午前は将来構想分科会に出席、午後は青年学生部会で新年度幹事の一人に選ばれた。

今年は、「光田健輔の強制的な手法」が大きなテーマとなった。1915(大正4)年に患者の絶対隔離(強制収容)と断種(子供が出来ないよう強制手術)、療養所長に懲戒検束権(警察権)を与

える『癪予防に関する意見』を国へ提出。ハンセン病が治る病気になった戦後も国会で「患者に手錠をハメても入所させねばならない」と刑罰による強制収容と、家族を含めた断種手術を提言するなど、日本の強制隔離政策の中心となった人物である。

光田園長に対する患者たちの初抵抗である長島事件(1936)の体験者、加賀田さんは当時を生々しく語り「子供たちには、相手が誰であっても間違いは間違いだと言えぬ人になって欲しい」。他の元患者や関係者の方からも「若者へ、正しく知って、正しく行動して」「闘わずして、何の問題解決もない。元患者がいなくなつた後も歴史的事実を負の遺産として再びあやまちがないように残してほしい」「自分が殴っている意識がない。相手の足をふみながら、良いことをしていると思う偽善」「自分を中立的だと思う人は、現状を何も変えずにトラブルを避けようとしているだけ」「被害の追体験は第三者には出来ないが、加害について考えることは出来る」などの発言があった。

わたしの妻は、数十年前の信者として過ごして来たのでカトリックの輪郭は承知していました。10年ほど前に妻が持ち帰った新聞により「カトリック通信講座」の案内を見て、これに加入して勉強したこともありました。平成20年より2年間にわたり東仙台教会においてパウロ女子修道会の長谷川昌子シスターより直接の指導を受けました。学識豊かな先生がご自分で作られた各種資料や参考図書をしめされたの指導により、十分に納得してこの度受洗させていただきました。

ハンセン病問題を考える⑤

仙台教区人権を考える委員会では5月22日(土)青森県にある国立ハンセン病療養所松丘保養園を訪問しました。園には130名ほどの方が暮らしており、カトリック信者は11名。園の皆さん、本町・浪打教会の皆さんと共に、平賀司教様・首藤神父様司式による聖霊降臨ミサを捧げました。聖霊は「炎のような舌が分かれ分かれて現れ、一人ひとりの上に留まった」。人間の尊厳や自由を踏み

にじることに對して、一人ひとりが「違う」と声を上げるための舌として、聖霊が降ってくるように聞こえました。ミサ後、園の信徒代表で、松丘保養園機関紙「甲田の掘」の元編集長の滝田さんが園内案内をしてくださり、松丘の歴史や現在の生活などを伺いました。これからも納骨堂を大切に守って欲しいというお話が印象的でした。ひと周りした後には伝道館で、皆さんが用意して下さった美味しい昼食を共にして、お話を伺いました。特に当時

「松丘闘争」と言われた「らい予防法改正運動」や、園の中でも独裁者がいて苦労されたこと、家族の問題など、仕方ないことではなくて人間が起こした人的被害なのだ、ということを感じました。

最後は司教様の民謡をはじめ、故郷の歌、謡曲、詩吟などを順番に披露するなど楽しい集まりとなり、一人ひとりの上に聖霊の輝きを感じる一日となりました。

(教区人権を考える委員会 御供真人)

復活祭に洗礼を受けて トマス・ベケット ③

渡辺 功(80代・男) 東仙台

わたしの妻は、数十年前の信者として過ごして来たのでカトリックの輪郭は承知していました。10年ほど前に妻が持ち帰った新聞により「カトリック通信講座」の案内を見て、これに加入して勉強したこともありました。平成20年より2年間にわたり東仙台教会においてパウロ女子修道会の長谷川昌子シスターより直接の指導を受けました。学識豊かな先生がご自分で作られた各種資料や参考図書をしめされたの指導により、十分に納得してこの度受洗させていただきました。

印象的だった。相手のためを思っで強制する、何が幸せかは自分たちが決める。それは「面倒を見るから言うことを聞け」と、相手を自立した人間ではなく、保護指導の対象と扱うこと。密室の中で、自分に従う者は救い、従わない者は「分裂」を招く逆らうものとして処分する、人間の尊厳と自由を踏みにじる考えです。現在も、宿泊を拒んだ温泉旅館が、責任を認めず形だけの謝罪を、元患者側が拒否したことへ殺到した「ゆるさないとは何様か。謝罪を受け入れて大人しくしている」という誹謗中傷に、かつての考え方が今も残っている。(御供真人)

日本カトリック女性団体連盟 第36回広島総会に参加して

5月27・28日、広島教区司教座聖堂・幟町(のぼりちょう)教会を会場に第36回広島総会が開催され、236名が参加した。

今回のテーマ「恵みの「いのち」を司祭召命に」と題して三末篤實司教(広島教区)が講演し、ご自身の生い立ちに触れながら、「神の愛に応えてチャレンジするのちを召し出し」とユーモアを交えながら話された。その後、分ち合い写真があり、午後は年次総会・各団体の報告が行われた。

28日は全国のDV施設に支援している「いのちを守る運動」の基金10年目を迎えての分ち合いが行われた。



幟町教会は世界平和記念聖堂として世界で最初に爆した広島に平和のシンボルとして献堂されただけあって大聖堂の他に地下聖堂、小聖堂があり、大きな教会だった。

遠い広島が身近に感じられ、地域の皆さんの温かいおもてなしに感謝しながら、あけの星会から派遣された代議員の務めを無事に終えて帰路についた。

(カトリック仙塩地区連合婦人会

会長 江刺 昌子)

10年目を迎えた 「いのちを守る運動」

日本カトリック女性団体連盟(略称・日力連)は、1999年の第22回沖縄総会のテーマ

「命どう宝(命こそ宝)」での分ち合いから、「命の始まりから自然死にいたるまで生かし合おう、尊い命！」を大会宣言として採択し「4・25いのちの日」を定めた。

2000年「命を守る運動」

の取り組みにおいて女性の人権についても討議され、1985年から夫の暴力から逃れ、自立を目指す女性のための初期のDVシエルター(横浜ミカエラ寮)を運営している礼拝会のSr.前田照子の話を聴き、弱い立場にある女性・子どもたちのことを知り、マザーテレサの「痛みのある愛」の言葉にも促され、祈りと献金で支援することになった。「運動基金」を設立し、全国の加盟団体からの献金は、2001年から各団体から支援要請されたDV関連施設(現在13団体)へ支援金として贈呈されている。当時はまだ「DV(ドメスティックバイオレンス)」という言葉さえあまり知られておらず、被害女性も我慢したり、隠し通している状況だった。同年、DV防止法(配偶者暴力防止法・被害者保護法)が制定され、また3年後の法改正により、被害者



の女性・子どもの立場が改善されてきてはいるが、まだまだいのちに関わる事件が後を絶たない。

あけの星会の取り組み

あけの星会では、この10年間毎月4月に元寺小路教会小聖堂で「4・25いのちの日」を記念してミサをささげている。歴代の指導司祭エメ神父・佐々木博神父・ラトゥール神父には、神様からいただいた大切な「いのち」への霊的指導をいただいている。ミサ後には、仙台女性への暴力防止センター「ハーティ仙台」のシエルター、親から女子の自立支援のために、日力連からの支援金を贈呈し写真し、「ハーティ仙台」創立時よりお世話下さっている方から現状報告をしていただき、「いのちを守る運動」への理解も深まってきた。

今後の課題

現在、若者たちのデートDV(交際相手からのDV)も大きな問題となっている。DV予防教育として、家庭や学校教育の大切さが問われている。韓国や台湾では小・中学校教育において家庭内暴力防止教育が義務付けら

れており、家庭を平和にすることから人権を重んじるようになったことも報告されている。教会でも、いのちを生み、育む大切な家庭のあり方と共にDVについても学び合えたらと思う。

シエルターの全国ネットワークも整ってきているので、命の尊厳を守るために今私たちが出来ることは、各市町村に相談場所があることを知らせ、草の根運動的に広く告げ知らせて行くことが大事だと思う。

(「ハーティ仙台」TEL/FAX 022-274-1885)
(日力連副会長 阿部正子)

訃報



スール・マリア・ルチア
小野寺いく子 o.p
聖ドミニコ女子修道会中島丁修道院

5月31日帰天(86歳) 誓願後48年
1954年8月15日受洗
1959年3月31日入会
1962年2月22日初誓願
入信前は日赤の看護婦として、引揚船でも勤務していた。
長年、学校や幼稚園の養護教諭として献身的に働き、多くの方々との関わりを大切にしました。お祈りください。

各地から

宮城県 塩釜教会 ラシャペル神父金祝

6月6日(日)平賀司教を迎えて主任司祭ラシャペル・アンドレ神父(ケベック宣教会)の金祝を祝うミサ(写真)と祝賀会が行われた。塩釜教会の信徒の他、一本杉教会、聖ウルスラ学院の旧職員などおよそ90名が参加した。



師は、1960年6月26日カナダで叙階され、翌年来日、1972年から1993年まで聖ウルスラ学院中・高等学校で

宗教の教師を務め、一本杉教会の司祭館に居住していた。

祝賀会で、「私が司祭になったのは家族の影響が大きかった。

父母が私に祈りの大切さと司祭への道を教えてくれました。

そして私はたくさんの人との出会いによって成長させていた

だき、司祭職を務めることが出来ました」と感謝の言葉を述べた。

聖ウルスラ学院の教師時代、ソフトボール部の顧問

をしていたが、師の投げるボールは誰も打てなかったほどのスピードがあったとか、当時揉上げを長く伸ばして、校長をしていたシスターから不評だったなどのエピソードが参加した元同僚から話された。信徒からの記念品や、花束、子どもたちからの霊的花束に、終始顔をほころばせていた。

北仙台教会
ラトゥール神父銀祝

原町教会と北仙台教会の主任司祭を務めるレイモンド・ラトゥール神父は、今年司祭叙階25周年を迎えられた。神父は、1985年カナダのオタワで叙階、翌年来日され、1989年に湯本教会着任以降、郡山、野田町を経て1994年4月から北仙台、同年11月から原町の主任司祭を務めている。司祭在職期間のうち、ほとんどの期間を仙台教区の小教区のため働いてこられた。



5月16日主の昇天の祭日に、原町教会と北仙台教会は合同で叙階25周年の記念ミサと祝賀会を行った。

記念ミサは、平賀司教主司式により北仙台教会でささげられた。五月晴れの朝、原町、仙台市内から集った信徒で聖堂はいっぱいになり、25年のうち16年余、両教会のため働いてこられたことに感謝と喜びの祈りをささげた。

ミサ後、会場を市内錦町のKRホテル仙台に移し、祝賀会を行った。祝賀会は、平賀司教、Sr.大沼(聖ドミニコ女子修道会日本管区長)のお祝いの挨拶に続き、ラトゥール神父が壇上に立ち、にこやかな表情で25年の歩みを振り返りながら、これから仙台教区内で働きたい旨希望と決意を述べられた。その後、両教会信徒からお祝いのスピーチ、原町さゆり幼稚園園児のお祝いの声録音再生、神学校以来の友人であるミシェル神父(福岡・箱崎教会主任)DVDレタ

ー再生、信徒によるカナダ国歌の独唱やフルートとチェロの演奏等、和やかな雰囲気の中に進行し、予定の午後2時半に終了した。神父様は、終始満面の笑みを浮かべられていたが、祝賀会に集った140名余の信徒達もこの喜びをともに分かち合えた

1日であった。

東仙台教会 東仙台教会恒例の草刈

(伊藤雅敏)

久しぶりに晴天に恵まれた5月30日、東仙台教会恒例の春の草刈が朝六時から開始された。

壮年部は草刈・集配・撤去にわかれ作業開始。間もなく婦人部の方々も炊飯・草刈に別れて黙々と行うこと二時間。垣根、ツツジの剪定も行い周辺は見違えるほど綺麗に。



神父からも草刈への感謝の電話。更にミサ中、渡辺神父も「綺麗になったね!草刈ご苦労さま」の一声に疲れも癒される。

写真:綺麗になった教会周辺
(佐藤定雄)

告知板

★マザー・テレサ生誕100年記念写真展 in 福島県

日時:2010年8月22日(日)~29日(日) 10:00~19:00(最終日17:00)

会場:二本松市市民交流センター 市民ギャラリー(3F)

写真提供:片柳弘史師(カトリック六甲教会助任司祭)

主催:カトリック二本松教会

問合せ:事務局 TEL 090-6629-1333

★第19回 核廃絶と平和を祈るミサ

日時:2010年7月16日(金)

18:30/ロザリオの祈り 19:00/ミサ

(司式 舟山 亨神父)

会場:カトリック元寺小路教会 小聖堂

主催:カトリック正義と平和仙台協議会

連絡先:080-1827-8772 (渡辺)

★元寺小路教会聖堂改修工事のお知らせ

大聖堂・小聖堂の空調設備、塗装などの工事を下記の日程で行います。工事期間中は聖堂に入れません。

小聖堂:6月21日(月)~7月10日(土)

*週日のミサは大聖堂で行われます。

大聖堂:7月12日(月)~8月10日(火)

*主日のミサ(7時・9時30分・18時)は小聖堂で行われます。

仙台教区年！ 2011

②函館教区機関誌「炬火」

様子を探ってみた。

◆「炬火」の創刊

「炬火」の創刊号「写真」は、1935（昭和10）年1月1日発行。編集は、プリオット師、印刷は笹気印刷所であった。

当時の、函館教区長アンドレ・デューマ師は、発刊の目的を教皇ピオ11世が、カトリックの出版物がいたるところに広まることを望まれた意向を受けてのこととしている。（原文は全て文語体）

また、「炬火」のタイトルには、日本列島の上を、「炬火」をくわえて走る一匹の犬が描かれている。



2011年7月から始まる「仙台教区年」に向けて、仙台教区の歩みを振り返って見よう。今回は、函館教区時代からドミニコ会が発行していた機関誌「炬火」（たいまつ）から、当時の

これは、聖ドミニコの母が、ドミニコを懐妊している時、一匹の犬が炬火をくわえて走り出し、全世界を明るく照らし出した夢を見たということを表し、この機関誌も教区内を明るく照らす道具になればとの願いを込めているという。ちなみに一部8ページで10銭となっていた。

◆元寺小路教会の創設

「炬火」第3号には「仙台元寺小路教会小史」と題して草創期の記述がある。

仙台教会の完全な歴史を知ろうとすれば、1世紀の初期までさかのぼらなければならないとして、伊達政宗の時代の宣教師ソテロ師のことから、広瀬川殉教のことに触れているが、元寺小路教会の誕生については、次のような記述がある。

1878（明治11）、プロトランド師（パリ外国宣教会）が仙台に教会を創設する目的で来仙し、間もなく仙台の中央部、元寺小路の土地を購入した。

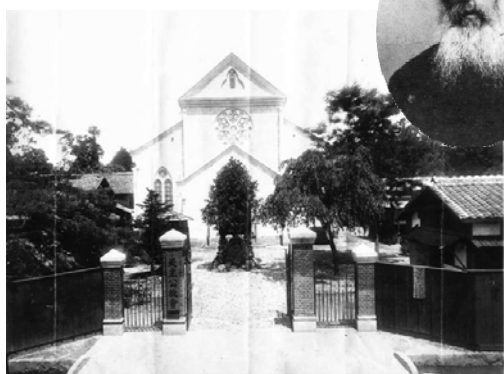
この土地は、旧藩士の屋敷跡で、長屋があり麵麴（パン）屋が住んでいたそうだ。このパン屋は、長崎で宣教師からパンづくりを学び仙台に来たと言われていた。この土地を購入した時は、この長屋は学校になっていた、これを仮聖



ヨーロッパより多額の

堂にし、プロトランド師は隣接した小さな家に住んだ。師の宣教活動により4年もたないうちに仙台に20名ほどの信者が生まれた。この働きを見た上長は、1882（明治1）年師を東京に呼び寄せ、ルマレシャル師と交代させた。新主任司祭は、3年間で10余名の受洗者を出した。

その後、レゼー師、モリー師と代わった。モリー師も4年間で、2名の受洗者を出したが、過度の活動で健康を害し、1893（明治2）年、主任司祭をジャック師（写真内）と交代した。ジャック師は1882（明治1）年以来仙台で活動していたので、信徒からは慕われていた。ジャック師はその後1927（昭和2）年まで、年間主任司祭として、信徒のためはもろろん、病者や、貧困飢餓に苦しむ人々のために散財した。さらに



援助金を得てゴシック式の大聖堂「写真」を建立した。

献堂式は1897（明治0）年6月2日、聖ペトロ・パウロの祝日に行われ、東京教区大司教他、各地の司教、仙台及び近郊の信徒はもろろん、県の高官、裁判所長、大学教授など町の名士など多数が参加したと記されている。

1902（明治）年以降函館教区の代理司教座となり、1925（大正14）年、ベルリオズ司教の希望により、司教座が函館に移るまで続いた。

クイズ 函館教区時代の大部分はパリ外国宣教会が司牧に当たっていたが、仙台教区の司牧に当たった外国宣教会はいくつでしょう。

＜前回クイズの答え＞
平賀司教は仙台教区で7代目の司教。
ベルリオズ司教・ルミュー司教・浦川和三郎司教・小林有方司教・佐藤千敬司教・溝部脩司教・平賀徹夫司教

新刊案内

八月六日の朝ぼくは十四歳だった
著者 長谷川 儀／発行 女子パウロ会／定価 1300円＋税

1945年8月6日、世界で最初に広島で原爆が投下されました。

本書は、現在、広島教区司祭として活躍なさっている長谷川儀（ただし）師が、14歳で被爆してからこれまでの道のりを書き表したものです。しかし、それだけでなく、儀少年が生まれた1931（昭和6）年頃からの社会状況の変化、広島という「軍都」の状況などが、少年の目を通じて、肌で感じ取った変化、軍国主義化への動きが書かれており、それが読者の心に響いてきます。

中学2年、兵舎として使われている学校を警備している時、突然、広島上空で、原子爆弾が炸裂。爆心地から2キロの地点で被爆し、生死の境をさまよいますが、両親をはじめ、多くの善意の人々の助けによって、奇跡としか表現できないような不思議な出来事によって、命をとりとめることができました。これは、のちに、イエズス会総長となったペトロ・アルペ神父様、パウロ・ネーベル神父様などの力にもよっています。

しかしそれは、神様が、この少年に生きて司祭という大きな使命をお与えになるためだったとしか考えられないことでした。原爆症との闘い、それを看病なさるご両親の献身、イエズス会司祭たちとの交流など、温かい人間関係が描かれており、読み終わった後も、この司祭とともにおられる神様の温かな大きなみ腕を感じさせます。